

従順ではなく敬虔への問いを：今、自然・ 環境をめぐる宗教的思索に求むべきこと

齋藤, かおる

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

5

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004495>

従順ではなく敬虔への問いを

— 今、自然・環境をめぐる宗教的思索に求むべきこと —

齋 藤 かおる

はじめに

自然・環境をめぐる二十世紀後半の様々な思索の中でも、最も熱心に意見の応酬が為され、その後も多くの言及が為されてきたのは、何と云ってもキリスト教の責任を問題にしたホワイト論争であるが¹、そのホワイト論争は、何らかの解り易い形で決着したわけではなく、表面的には何となくウヤムヤになってしまった印象を残して現在に至っている。それは、一つには、現実の事態（世界的自然・環境破壊の進行）への対応に追われて、いつまでもホワイト論争に執着している場合でなくなったからである。そしてもう一つには、そもそもホワイト論争を問題にすることに、あまり意味が感じられなくなったからである。確かにホワイトの主張には無視できぬ視点が含まれていた²、それに応答したパスモアらの主張にも尤もな面があったのだが³、キリスト教文化圏とは言えない国々においても基本的に自然・環境破壊には歯止めがかからなかった20世紀後半の世界的現実が、ホワイト論争のような宗教の在りようを問題にする思索の意味を、次第に見えにくくしてしまったと言える。

では、現状、特にキリスト教界の側から為されている思索はどうなっているのかと言うと、一部の神学者たちによる誠実な思索ぶりが目を惹くものの、一般的傾向としては、聖書にどんな記事があってどう解釈・援用できるかとか、過去の神学者がどんな考え方を示しているかとかいったものが殆どであって、これは少々残念なことである。と言うのは、そもそも現代の自然・環境問題を念頭にいった聖書の解釈という行為には無理があるし、聖書の援用も慎重であ

るべきである。聖書は、特定の時代と状況のもとで書かれたものであって、当然のことながら、当時は今のような自然・環境破壊は当時の人々の思い及ぶところではなかったのである。従って、聖書の解釈から何らかの直接的解答を得ようとしても無理だし、聖書の援用も、文脈を踏まえた慎重なものでなければ、聖書のように分厚い書物からは何でも言えてしまう。そして実際、カルトやオカルトも含めたありとあらゆる方向性の人々から利用されてきた過去が、聖書にはある。

とは言え、キリスト教を視野に入れて自然・環境問題を考えることには、少なからぬ意味がある。欧米では、ホワイト論争後の多くの人々の事実として、自らの暮らす文化圏の宗教的在りよう（キリスト教的在りよう）への反省が、環境保護活動に取り組むモチベーションの一つになっており、そのことは、欧米における活発な市民活動の中でそれなりに実を結んでいるからである。個々の市民が環境保護活動に向かうべきなのは、彼／彼女が一市民だからであって、特定の宗教に属しているからでは決してないが、特定の宗教（あるいは特定の宗教文化圏）に属していることが彼／彼女の心の励みになることは、基本的に悪いことではない。そしてそうであってみれば、今、キリスト教を視野に入れた自然・環境問題をめぐる思索に求むべきことは、聖書そのものよりも、むしろ聖書に依りつつ生きてきた人々の在りように注目すること—具体的には、一部の神学者たちの誠実な思索（模索）を歴史的に位置付けることと、その位置付けが指し示す方向性を明確にするために何が必要かを考えること、この二つである。進むべき方向性を自覚せぬエネルギーがしばしば社会的に暴

走したり、人々を禁欲的な在りようへと抑圧したりすることを考えると、今、キリスト教を視野に入れた思索の道筋を整えることは、欧米の環境保護活動の健全な進展にとっても、また欧米を手本にその後を追っている日本にとっても、とても大事なことである。

本稿では、このような問題意識を持ちつつ、ホワイト論争後の一部のキリスト教神学者たちの仕事を“哲学者の神”への問いを継ぐことと位置づけ、またその今後進むべき方向性を敬虔の回復と考え、以下少しく検討を試みる。その際、特に手掛かりとするのは、スピノザとアシジのフランチェスコである。

I “哲学者の神”への問いを継ぐこと —現代の神学者たちの位置

キリスト教の立場から自然・環境破壊の現状を考察し、具体的対策を提案しようという方向性は、基本的には20世紀後半、特にホワイト論争以降のもので、リートケ、リンゼイ、マクフェイグといった神学者たちに代表される。そして、それ以前の近世初頭から二十世紀半ばにかけての時期は、中世にトマスがアリストテレスやアウグスティヌスを援用しながら固めた自然観一神が動物や植物を創造したのは人間のためであって動物や植物の使用は人間の支配下にある (*Summa Theologica*, II, Q. 64-65) という古い自然観が、少しずつほぐれながらも破られぬままだった時期である。従って、この時期は、一面においてホワイト論争以降の神学者たちの仕事を準備した長い長い経過だったとも言える。

現代社会が抱えているような自然・環境破壊は、20世紀前半にはまだなかったか、顕在化していなかったか、顕在化していてもその事実が正しく把握されていなかったのか、同じ20世紀を生きた神学者でも、その活躍時期が20世紀半ばか後半かで、その仕事内容は決定的に異なる。体系的な思索や浩瀚な論述を残した神学者はたいてい、自然・環境についても何らかの考えを表明しているが、それが20世紀半ばまでに為された仕事であるなら、そこに見受けられるのは、何を問いただすべきなのかがはっきりと自覚さ

れぬままの、トマスの思考枠に留まった論述であることが殆どである。例えば、20世紀を代表する神学者バルトでさえも、神の戒めが人間にかかわり人間の生にふれるものだということに拘り、動物も植物も全地もすべて神のものではあるが人間の生活手段だと断言しているようなことであって (*Kirchliche Dogmatik*, III/4)、そこには、時間的には至近距離にあるにもかかわらず、ホワイト論争後の一部の神学者たちと結び付くものは何もない。つまり、近世初頭から20世紀半ばにかけての時代は、自然・環境をめぐる思索においては、キリスト教神学は不在だったのである。

しかし、近世初頭から20世紀半ばにかけての時期、哲学の世界では、キリスト教神学が果たせずにいた役割が果されていた面がある。と言うのは、この時期、哲学・思想的には、“哲学者の神”への問いという注目すべき流れがあったからである。そして、この時期の“哲学者の神”への問いにあらためて注目する時に、ホワイト論争後の一部の神学者たちの仕事の、“哲学者の神”への問いを継ぐという位置取りが浮き彫りになるからである。

“哲学者の神”への問いは、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。哲学者および識者の神ならず」(「覚書」火) という有名なパスカルの言葉が象徴するように、活きた信仰とは無関係な言葉遊びとして蔑まれることが少なくなかった。そしてそれにもかかわらず、やはり真摯な知的営みとして連綿と受け継がれ20世紀に至り、例えばティリッヒのような神学者においても、その神学的営みの一つの重要な鍵となっている(『生きる勇氣』、第1章Ⅲ)。これは、考えてみれば当然のことである。啓蒙の時代に幕を引き近代の幕を開けたカントが、『実践理性批判』や『たんなる理性の限界内の宗教』で一つのモデル・ケースを示したように、一般に活きた信仰と呼ばれるものが本当に活きた信仰であるためには、どこまで考えどこから信じるかという境界線の引き方、カント風に言えば信仰への道のあげ方を考え抜くことが必要だからである。神を言語表現の対象として追求することの不可能性を十分に認識しつつも敢えてそれを試みるの

が、“哲学者の神”への問いと呼ばれる態度であるならば、それは決してキリスト教神学から遠くないからである。

さて、この近世初頭から20世紀中ばにかけての時期の哲学・思想史を覗き込むと、何人もの“哲学者の神”の探究者たちの姿を見出せるが、中でもとりわけホワイト論争後の神学者たちの励みになるような思索を展開したのは、スピノザである。

スピノザが考え抜いた（それ以上は考えられないとして信じた）神は、「神のほかにはいかなる実体も存しえずまた考えられ」（『エチカ』第一部定理一四）ず、「個物は神の属性の変状、あるいは神の属性を一定の仕方では表現する様態」（同第一部定理二五系）であるような神であり、そこから自然について帰結することが次々述べられる。完全や不完全、また善や悪といった概念を、異なる種や類に属する個体について持ち出すことについて、スピノザは、「同じ種あるいは同じ類に属する個体を相互に比較することによって作り出すのを常とする概念に過ぎない」（同第四部序）、「人間が自然物を完全だとか不完全だとか呼び慣れているのは……偏見に基づいている」（同第四部序）、「自然は目的のために働くものではない」（同第四部序）と批判している。そして、「自然の中にはそれよりもっと有力でもっと強大な他の物が存在しないようないかなる個物もない」（同第四部公理）、「人間が自然の一部でないということは、不可能」（同第四章定理四）、「おのおのの事物は……常に存在に固執することができ……この点においてはすべての物が同等なのである」（同第四部序）と主張している。つまり、スピノザは、自然の中に神の意図ではなく神の存在のみを読み込むことと、人間には自然を搾取する権利など一切ないことを、言明しているのである。そしてその言明は、“哲学者の神”を問い詰めた末にスピノザが出した結論であるゆえに、ホワイト論争以後のキリスト教神学に対する厳しい問いとなっている。それは、そもそもホワイト論争を経ただけでなく、20世紀に二つの大戦を経た時代である現代の状況が、もはや過去の遺産との穏やかな共存を計るようなキリスト教神学を許してくれないから

である。ただ祈っているだけでは、戦場に助けは来ないし、自然・環境破壊も修復されない。そしてそうであってみれば、現代のキリスト教神学は、“哲学者の神”を問い詰めることのそのまた先を語らなければ、世界に対して説得力を持ってないからである。

スピノザに代表される近現代の“哲学者の神”への問いについて、キリスト教神学はこれまで殆ど関心を払わずにきた（と言うよりも慎重に避けてきた）のだが、現在最も意欲的に自然・環境問題に取り組んでいるキリスト教神学者の一人であるマクフェイグがスピノザに目配りしているのは（*Metaphorical Theology*, p. 34）、マクフェイグが今後のキリスト教神学の行方を大きく左右し得る立場にある学者だという点で意味のあることだし、そのスピノザに目配りする（つまり“哲学者の神”への問いに目配りする）ような姿勢は、マクフェイグの仕事の中で実を結びつつもある⁹⁾。

マクフェイグらホワイト論争後の一部のキリスト教神学者たちが、それ以前の神学者たちと決定的に違うのは、現実としての悲惨な自然・環境破壊への向き合い方である。自らの目の前で起こっていることに対し、キリスト教の枠を越え一人の人間として納得できる進路を見出そうと努め、その上でその進路をキリスト教的にも基礎づけようと努めていることである。それは、ホワイト論争が、宗教的既成概念・価値観への無反省に強く警鐘を鳴らすものだったし、また特定の宗教的立場からの良き在りようにも実に幅があることへの考察を促すものだったことを考えると、ホワイト論争をキリスト教神学の立場から何とか越えようとする試みだと評価できる。そしてそれは、具体的には、従来のキリスト教神学が注意深く避けてきた“哲学者の神”への問いの領域へと踏み込み、神という概念を根本的に問い直し、自然の中に大胆に神の存在を読み込んでゆくという、近現代の哲学がキリスト教神学の代わりに果たしてくれた役割を継ぐことだと位置づけて良いように思われる。

Ⅱ 敬虔の意味への問いを回復すること —現代の神学者たちに求むべき今後

キリスト教神学が、これまで慎重に避けてきた近現代の「哲学者の神」への問いの流れへと踏み込んでそれを継ぐことは、要するに、自然・環境と人間との関係の中に、神と人間との積極的・直接的関係を持ち込むということである。トマス以来の伝統的思考枠を破って、自然・環境の中に手段ではなく目的を見るところである。ホワイト論争以後の一部のキリスト教神学者たちが傾けている努力は、そういうことである。では、それは一体どういうことだろうか？ 日々の自然・環境とのかかわりにおいて、神との積極的・直接的関係を意識し、手段でなく目的を見るところは、どういうことだろうか？ どういうことであるべきだろうか？ それは、一面において、いわゆる敬虔を従順から掬い出すことだと考えられる。なぜならば、自然との関係において神との積極的・直接的関係を意識するようになり、自然・環境を手段ではなく目的として見るようになることが、キリスト教神学の本質にかかわることならば、それは、現代のキリスト教が直面している喫緊の課題の克服でもあるはずだからである。そしてそれは、何よりも敬虔の回復のはずだからである。

従順は、しばしば敬虔と混同され、しかも時に非常に危険な循環を形成する、信仰的主従関係における一つの在りようである。従順から生じ得る危険な循環については、既にゼレが指摘している。ゼレは、ナチス・ドイツの強制収容所において指導的立場にあったヘスやアイヒマンを例にあげて、次のように主張している。「神学者にとっては、アイヒマン、ヘス、その他、何千人もの人々の口に、繰り返しのぼった従順という言葉の喉につかえさせるだけで充分である。このように使われてしまったあとでは、神学的に無垢な概念としての従順について、さらに語るということとはできない……神に対する従順と人に対する従順を識別するというような、すぐ思いつく試みも、これ以上救う力はないように見える……私たちは今日、キリスト者として、従順一般を批判する義務があるし、しかも、こ

の批判は、根源的でなければならない……まじめに神について語るうとすれば、歴史の外へ飛び出て考えることはできない……キリスト教の今世紀の歴史の中では、従順が、カタストロフ的役割を演じてきたのである」（『キリスト教倫理の未来』、17～18頁）と。また、「歴史の中では……誤解され……小さく刈り込まれ、自分の利害に奉仕するようにされたキリストが生起するのであり、そのキリストは、いとも簡単に操作されてしまう……良心を少しも鋭敏にしないキリストは死んだままなのである……良心の形成という領域以上に、伝統の硬化が深刻な影響を与える領域はない……そして、従順というポイントこそ、このような良心の化石化を可能にした」（『キリスト教倫理の未来』、11～12頁）と。そして、このようなゼレの指摘を否定することは難しい。確かに、従順という概念には、あらゆる信仰的・道徳的内省を絡め取って無力化してしまう力が、それ自身のうちに備わっている。内省なしに速やかに従順が示されるほどに、従順という在りようの精度は高まる。とすると、従順の美徳的価値にこだわる者ほど従順から従順へと延々従い続けることになるし、そのような在りようは、信仰的主従関係においてしばしば賞賛の対象となる。初めに敬虔があって、そこから初めの従順が生じるのは確かなのだが、ひとたび従順が生じると、従順は敬虔へとは戻ってゆかぬまま、従順という在りようの中で出口を持たぬまま自己循環する—このような従順を生み出す信仰的主従関係の、そのまま社会的に転用され得る構図が、何とも恐ろしいわけである。初めに敬虔があって、そこから従順が生じる。但し、その初めの敬虔は、それ以前に、敬虔な思いを向けずにはいられないような何らかの主体との出会いの喜びがあってこそ生じるものである。手段ではなく目的としての何らかの主体との出会いの喜びがあってこそ、敬虔が生じ、敬虔から従順が生じるのである。従って、従順が敬虔へと戻ってゆかぬことは、何らかの主体との出会いの喜びも、その何らかの主体の目的としての在りようも見失われることになる—このような構図が恐ろしいわけである。そしてこの信仰的主従関係の構図は、自然・

環境問題の領域だけに絞ってみても、京都議定書（温暖化ガスの排出規制）やバーゼル条約（有害物質の国外搬送規制）などをめぐる幾つかの国々の動きを見れば、いとも容易く社会的に転用され得ることが明らかである。敬虔を出会いの喜びと言い換えれば、幾つかの国々が京都議定書やバーゼル条約を批准しないことの、自国の目先の利益という形の従順の要求に従った自己循環であるという構図が、容易く理解されるのである。

では、この従順の自己循環を、どう解きほぐせば良いだろうか？ どうすれば、従順から敬虔を掬い出し、何らかの主体との出会いの喜びを蘇らせ、従順が「カタストローフ的役割を演じる」ことへと平板化されてしまうのを防ぐ道筋を見出せるだろうか？ それは、従順の檻に閉じ込められることのなかった、現実には生きた人々の在りように注目するのが、おそらく一番の近道である。例えば、自然・環境問題に関心を持つ立場からも頻繁に言及される、中世の聖人アッシジのフランチェスコ。従順の鑑と賞賛されはしても、決して従順の檻の囚われ人ではなかった、あのフランチェスコのような人の在りようから学ぶのが、一見迂遠なようであっても実は近道であり、大事なことである。

さて、フランチェスコと従順をめぐっては、チェラーノのトマスが次のようなフランチェスコの言葉や態度を伝えている。「実に目下は、その目上において、人間を見るよりもむしろ、誰の愛のために従うべきかを考えなければならないのです」（『第二伝記』、第111章）と。また「聖人は従順の名によって命令すべきことはまれであると思ひ、最後に投げるべき槍を始めに投げてはならないし、“すぐ刀を抜いてはいけない”と言っていた」（『第二伝記』、第113章）と。これらのチェラーノのトマスの証言は、フランチェスコの考えている従順が、従順という在りようの中で自己循環するような類のものではないことを示している。なぜならば、従順がそのつど敬虔へと立ち戻るべきことが、「誰の愛のために従うべきかを考えなければならない」と求められているし、そこにおいて、敬虔に先行する出会いの喜びと、その喜びの発端である何らか

の主体を意識するべきことが、「誰の愛のために」と明確に求められているからである。しかもフランチェスコは、従順の自己循環を引き起こしかねない従順の命令を、最後に投げるべき槍と呼んで警戒を促しているからである。そして、それらのことから明らかなように、フランチェスコが考えている従順とは、その従順そのものの精度によってではなく、最初の敬虔に先立つ出会いの喜びによって定義されるようなものである。つまりフランチェスコの従順は、決して命令への応答ではなく、従順という言葉の意味の分析から必然的に帰結するようなことでもなく、むしろ敬虔を繰り返し具体化することによって、その敬虔の具体化という在りようが、一方でフランチェスコの従順に常に自発性を与え、一方でフランチェスコの従順を自己循環への転落から護っていると云える。

キリスト教の立場からはもちろん、一般的立場から自然・環境問題を論じる際にも、フランチェスコは頻繁に言及の対象とされている。それは、一つには諸伝記が伝えるフランチェスコと自然との奇跡的エピソードの数々のゆえでもあるが、やはり何と言ってもフランチェスコが詠った「被造物の讃歌（太陽の讃歌）」のゆえである。

「いと高き方よ、全能の、善き主よ
讃美と、栄光と、誉れと、すべての祝福は、あなたのもの。

いと高き方よ、それらはあなただけにふさわしいもの。

いかなる者もあなたの御名を呼ぶに値しません。

わが主よ、あなたが讃えられますように、あなたのすべての被造物とともに、とりわけ兄弟なる太陽とともに。

太陽は昼であり、あなたは太陽によって私たちに照らして下さいます。

太陽は美しく、大いなる輝きによって光り、いと高き方よ、あなたの意味を告げてくれます。

わが主よ、あなたが讃えられますように、姉妹なる月と星々によって。
あなたはこれらを天に明るく輝き、貴く、美しいものとして形作られました。

わが主よ、あなたが讃えられますように、兄弟なる風によって。
また、空気と雲と晴天とあらゆる天候によって。
あなたはこれらによって、あなたが創られたものを養われます。

わが主よ、あなたが讃えられますように、姉妹なる水によって。
水は、益多く、慎ましく、貴く、清らかです。

わが主よ、あなたが讃えられますように、兄弟なる火によって。
あなたは火によって、夜を照らされます。
火は美しく、快活で、たくましく、強いのです。

わが主よ、あなたが讃えられますように、私たちの姉妹にして母なる大地によって。
大地は私たちを養い、治め、さまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。

わが主よ、あなたが讃えられますように、あなたへの愛のために許し、病と苦しみを堪え忍ぶ人々によって。

平和な心で堪え忍ぶ人々は、幸いです。
いと高き方よ、彼らはあなたから栄冠を受けますから。

わが主よ、あなたが讃えられますように、私たちの姉妹なる肉体の死によって。
生きている者は誰も、この死から逃れることはできません。

大罪のうちに死ぬ者は、災いです。
あなたのいと聖なる御旨のうちにある者は、幸いです。
第二の死が、彼らに害を及ぼすことはないのですから。

私の主を誉め、祝しなさい。
そして、主に感謝し、深く慎みながら主に仕えなさい。」
(フルゴーニ「アッシジのフランチェスコ」、219～232頁)

この讃歌については、ヨルゲンセンが「聖フランシスコの自然への関係を理解しなくてはならない。フランシスコを汎神論者と呼ぶことほど間違った事はない—決して神をも自分をも自然と混同してはいないし……宇宙と一つになることを願わなかった。聖フランシスコの自然に対する立脚点は、まったく完全に……天地の創造主全能の神である父を信じます、ということ。この同一なる父に対する共通の関係から……被造物である一別のものの中に、ただ兄弟と姉妹だけを見るのである」(「アッシジの聖フランシスコ」、462～463頁)と述べているが、このヨルゲンセンの論述は、フランチェスコが生きた「父に対する共通の関係」を指摘している点で特に重要である。同様の指摘は、トインビーの論述などにも見出せる (*Mankind and Mother Earth*, p 464)。つまりフランチェスコは、自然・環境を利用資材として対象化するのではなく、また保護すべき弱者として対象化するのでもなく、互いに「父に対する共通の関係」を生きる者同士と捉えることで、自らと自然・環境との関係の在りようを喜びに溢れつつ味わいながら、日々積み重ねていたということである。もう少し丁寧に言えば、それぞれ「共通の関係」を生きている者同士の間に生じる新たな関係の、その新たな関係の結ばれることを喜びながら、日々を積み重ねていたということである。そして、その新たな関係の結ばれることが喜ばしいのは、「共通」であるところの、それぞれが持っている「関係」の中に既にある喜びが、根拠となつたことだと考えられる。従って、自然・環境とフランチェスコとの関係の在りようは、基本的に、フランチェスコのキリスト者としての在りようが従順の自己循環を免れていたことの延長線上にあると言える。そしてそれゆえ、フランチェスコの生の在りようを、現代神学の喫緊の課題—敬虔の意味への問いの回復の、一つの重要な

手掛かりとして位置づけて良いし、またそれは自然・環境問題へのキリスト教神学的取り組みにおいても、やはり一つの重要な手掛かりとして位置づけて良いように思われる。

Ⅲ おわりに

スピノザは、実に多くの近・現代の学者や思想家や芸術家から愛されてきたものの、キリスト教界からは殆ど評価されることなしにきた。またフランチェスコも、キリスト教界を始め世界中の多くの人々から愛されてきたものの、一方でその生の在りようを、例えばヴォルテールが「心身喪失の夢想家」と切って捨てたように（ドイル『現代に生きる「太陽の賛歌」』、10頁）、一般化できない特殊な人物の特殊な事例として扱われることが少なくなかった。

しかし、彼らの思索と生の構図を丁寧に辿ってゆくなら、そこから得られるものはとてもとても大きい。神という概念を根本的に問い直し、敬虔の意味への問いを回復することは、自然・環境との和解へと直接的に繋がってゆくからである。そのことが、狭い意味でのキリスト者に留まらず、広くキリスト教文化圏の人々の、自然・環境保護活動に取り組むモチベーションをさらに高めることを期待できるからである。そして、自然・環境問題には様々な人間社会の問題の縮図と言える面があることを考えれば、何らかの主体との初めの出会いの喜びのエネルギーの行方を考えることへと促されることは、非キリスト教文化圏に暮らす非キリスト者にとっても意味のあることだからである。およそ問題を改善してゆくのは、社会の、つまり人と人との繋がりのエネルギーだからである。

註

- 1) ホワイト論争とは、1966年のクリスマスの翌日にアメリカ科学振興協会に提出した論文の中で、ホワイトJr.が現代の自然・環境破壊の責任をキリスト教に帰したために起こった、多くの学者たちによる論考の応酬騒動。
- 2) 現代の世界的環境破壊の原因を問い詰めると旧約聖書の一言に辿り着くという、一見極端なホワイトの視点は、およそキリスト教文化圏に暮らす者なら老若男女の誰もが知っている一言を指し示したということのゆえに、独自の位置を保っている。文化に深く浸透している言葉によって、もしかしたら自分たちは自然を搾取する存在へと規定されているのかもしれない—そのような自己反省へと、キリスト教文化圏の人々を繰り返し促すからである。
- 3) 実際、パスモアらの主張する委託管理者精神 (stewardship) の力は、アメリカの、人間中心主義的傾斜にもかかわらず基本的には自然の権利を拡大する方向で進んできた環境保護運動・環境倫理学の展開において、少々複雑な形ではあるが確認できる。
- 4) 哲学・思想史における“哲学者の神”への問い一般については、Picht, G.; *Der Gott der Philosophen und die Wissenschaft der Neuzeit*. を参照。
- 5) マクフェイグは、汎神論やアニミズムといった短絡的レッテルを張られることなしに、すべての自然物を神の腕の中へと（つまり、創造された喜びの中へと）戻し、そのすべての自然物において人間が神の顔ではなく神の後ろ姿（旧約聖書 出エジプト記 33: 18~23参照）を見ることを目指しているのだが、これは、たいていの欧米のキリスト教神学者なら躊躇する大変な作業である。西欧キリスト教文化圏には、汎神論やアニミズムに対する拭い難い偏見・蔑視があり、唯一神教であるキリスト教の内側から汎神論やアニミズムへの親近性を連想させるようなものが出てくるのを嫌う傾向が非常に強いからである（とは言え、実際には、西欧キリスト教文化圏の歴史の中にも汎神論的なものやアニミズム的なものが常にあったし、それらはその時々文化に豊かさを与えてきたのだが）。「マクフェイグにおけるケアの倫理—環境問題へのキリスト教の可能性と課題—」【神学研究 第50号】関西学院大学神学研究会、2003年3月、参照。

参考文献

- ◆McFague, S.; *Super, Natural Christians*, Fortress Press 1997.
- ; *The Body of God*, Fortress Press 1993.
- ; *Models of God*, Fortress Press 1987.
- ; *Metaphorical Theology*, Fortress Press 1982.
- ◆Picht, G.; *Der Gott der Philosophen und die Wissenschaft der Neuzeit*, Ernst Klett Verlag 1966.
- ◆Toynbee; *Mankind and Mother Earth*, Oxford University Press 1976.
- ◆スピノザ『エチカ（上）』（『エチカ（下）』（畠中尚志訳）岩波文庫、1975年。
- ◆ゼレ『キリスト教倫理の未来』（吉村秀子訳）新教出版社（新教新書225）、1987年。
- ◆チェラノのトマス『聖フランシスコの第二伝記』（小平／ゲンク訳）あかし書房、1992年。
- ◆ティリッヒ『生きる勇気』（大木英夫訳）平凡社ライブラリー（102）1995年。
- ◆ドイル『現代に生きる「太陽の賛歌」』（石井健吾訳）サンパウロ、2000年。
- ◆パスカル『パンセⅡ』（前田／由木訳）中公クラシックス（W11）、2001年。
- ◆バスモア『自然に対する人間の責任』（間瀬啓允訳）岩波書店、1998年。
- ◆フルゴーニ著『アッシジのフランチェスコ』（三森のぞみ訳）白水社、2004年。
- ◆ホワイト『機械と神』（青木靖三訳）みすず書房、1972年。
- ◆ヨルゲンセン著『アッシジのフランチェスコ』（佐藤要一訳）ドン・ボスコ社、1979年。
- ◆リートケ『生態学的破局とキリスト教』（安田治夫訳）新教出版社、1989年。
- ◆リンゼイ『神は何のために動物を造ったのか』（宇都宮秀和訳）教文館、2001年。